

博士学位論文要約

中国人日本語学習者による周辺語彙の理解

The understanding of Japanese marginal vocabulary by  
native Chinese speakers learning Japanese

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

張 婧璋

平成 28 年 2 月

## 要約：

語彙は、中心語彙と周辺語彙に分けられる。中心語彙（基本語彙または基礎語彙）は、日常生活で多様な表現で使用され、使用頻度が高く、知識の専門性に関係なく文を構成する中核的な要素となる語の集合である。それに対し、周辺語彙は、方言、隠語、流行語などのように使用頻度が低く、使用範囲の狭い語の集合である。周辺語彙は、中心語彙を基盤として理解が広がっていく傾向がある。そこで、本研究では、NV型複合名詞、複合語型の和製英語および流行語の3つの周辺語彙を対象として、中心語彙に基づく周辺語彙の理解のプロセスを検討した。

第1に扱った周辺語彙は、NV型複合名詞である。複合名詞には、「名詞＋名詞」、「動詞＋動詞」、「名詞＋動詞」など多様な構造を持つものがある。本論文では、特に、「名詞＋動詞」の構造をもつ複合名詞を対象として、日本語学習者によるこれらの周辺語彙の理解を調査した。中国語を母語とする日本語学習者に対して、NV型複合名詞の理解と同時に、中心語彙の知識と基本的な文法の知識を問うテストを同時に実施して、これらの周辺語彙の理解を促進する背景要因を検証した。

まず、日本語の中心語彙の知識に基づいて上位・中位・下位の3群に分け、一元配置の分散分析で検討した。その結果、まず中心語彙の理解がこれらの複合動詞の理解に影響することが分かった。さらに、3群の理解得点を基にして、NV型複合名詞の、理解パターンを分類すると、2つに分けられた。

一つは、「主語＋動詞」（「夜明け」など）と「意味・統語的無関係」（「左利き」など）の複合名詞で、3群間の理解得点は「下<中<上」となり、下位群から上位群に向かって段階的に得点が上がっていた。この理解パターンは、中心語彙の知識が向上するにつれ、NV型複合名詞に対する理解が伸びてくことを示した。

もう一つの理解パターンは、「目的語＋動詞」（「湯飲み」など）と「補語＋動詞」（「後回し」など）の複合名詞の理解である。3群間による理解得点は「下＝中<上」となった。つまり、中心語彙の理解がある程度高くないと、理解が進まないという理解パターンである。複合語彙にも、中心語彙の理解と共に伸びていくものと、ある程度の中心語彙の蓄積が必要なものとの2種類があることが分かった。

さらに、3群の理解度を基にして、40語を対象にクラスタ分析を用いて、さらに詳細に4つに分類して検討した。(1)「首飾り」「歯磨き」などのように、漢字を表記手法とする中国人日本語学習者にとって、漢字知識を手掛かりにして理解が容易になる「母語の語彙知識を有効に利用できる複合名詞」であり、理解度が高かった。(2)「手掛かり」「腰掛け」「湯飲み」などのように、「掛かる」「掛ける」という有対自他動詞を含み、また、動詞句に還元できるものの、指示物のカテゴリが不特定であるため、意味が理解し難くなる「指し示すものが特定しにくく、自他対応の動詞を含む複合名詞」であり、最も理解度が低かった。(3)「人込み」「心当たり」などのような語彙量に関わる「語彙知識の広さが関与する複合名詞」であり、理解度はやや高かった。(4)「日差し」「仲直り」などのような各構成する語に対して、意味知識に関わる「語彙知識の深さが関与する複合名詞」で、理解度はやや低かった。

第2に扱った周辺語彙は、複合語型の和製英語である。複合語型の和製英語を研究対象として、日本語を専攻とする英語・日本語の両言語に堪能な中国人日本語学習者に対し、日本語の中心語彙テスト、英語の語彙テスト、和製英語理解テストの3種類の語彙テストを実施した。重回帰分析の結果、和製英語の既知度と理解度には、日本語の語彙知識は影響していなかったが、英語の語彙知識からの影響が見られた。英語の動詞の知識は和製英語の理解を促し、形容詞の知識は阻害していた。たとえば、「オープン」という英語の動詞が、和製英語の「オープンカー」に使われても意味は大きく変わらない。しかし、和製英語の「シルバーシート」の「シルバー」は、JR（当時は国鉄）が高齢者用にシートを灰色っぽい銀色（シルバークレイ）にしたことが語源であり、英語から類推することはできない。英語の形容詞は日本語の中で意味的に拡張し易い語彙範疇であるといえよう。

さらに、和製英語の理解度と既知度から28語をクラスタ分析で3つに分類した。それらは、(1)「ハイウェイ」「ゲームソフト」などの「理解容易な和製英語」で、対応する英語の単語や表現形式が類似しており、英語の語彙知識から容易に推測できる語である。(2)「ベッドタウン」「スキンシップ」などの「理解困難な和製英語」で、多義的または意味拡張があり、構成する2つの英単語の意味が和製英語の意味とかけ離れており、英語の文法規則に従わない語である。(3)「タイム

サービス」「ミスコンテスト」などで、「推測可能な和製英語」で、修飾部と意味的主要部が構造的に明瞭であり、英語に堪能な日本語学習者にとって、意味的に推測し易い語である。

第3に扱った周辺語彙は、流行語である。流行語は、日本語教育における語彙教育の対象とされることはほとんどない。しかし、中国人日本語学習者は、ドラマ、アニメ、漫画などにより流行語に接する機会が多く、日本語学習の動機付けにもなっている。そこで、日本語を専攻する中国人日本語学習者を対象に、中国人日本語学習者による流行語の理解について検討した。近年の流行語に対する理解を測定するために、流行語の理解テストを実施した。また、同時に日本語の中心語彙テストを実施して、影響関係を考察した。

まず、語彙能力に基づき上位・中位・下位の3群分けて、流行語の理解得点についての分散分析を行った。その結果、中心語彙の理解がこれらの流行語の理解に影響し、中心語彙の能力が向上するほど、流行語の意味の理解も伸びることを確認した。

さらに、中心語彙の語種と品詞別の得点から流行語の理解を予測する重回帰分析の結果、語種別で、外来語と漢語の知識が流行語の理解を強く促進する傾向を示した。流行語のうちの多くは「干物女」「アラカン」「ネットカフェ難民」などのような、外来語、漢語、または混種語であるため、外来語と漢語の語彙知識が流行語の理解に大きく貢献していると予想される。

さらに、30語の流行語の理解を基にクラスタ分析を行った結果、4つに分類された。それらは、(1)「干物女」「萌え」などの「ACGに深く関わる理解容易」な流行語である。ACGとは英語はアニメ、コミックとゲームの英語の頭文字をとり、作られた略語である。それらの語彙はACGを媒介にし、流布したため、若い学習者に馴染みがあるものでもあり、中国語に定着したものも含んでいる。この分類の理解度は4つの中で最も理解度が高かった。(2)「クールビズ」「ネットカフェ難民」などの「日本社会と関わる推測可能」な流行語である。日本に関わる背景知識が求められるが、構成する語の意味により、正しく推測できる範囲の語であり、理解度は比較的高かった。(3)「がばい」「ワーキングプア」「赤ちゃんポスト」などの「日本社会と関わる推測困難」な流行語である。それらの語彙

は、社会や時代の変化に応じて新しい物事が現れるので、構成する語における意味拡張が起こる可能性があると考えられ、理解度は比較的低かった。(4)「ハニカミ王子」「事業仕分け」などの「日本社会と関わる理解困難」な流行語である。これらの語彙は、新奇な用法を用いている場合もあり、恣意的なものであるため、背景にある社会文化的な意味内容の理解がなくては、語の理解が難しく、理解度が4つの分類のうち、最も低かった。

以上のように、本博士論文では、中心語彙の理解と関係させながら、NV型複合名詞、複合語型の和製英語、流行語の3種類の周辺語彙の理解を検討した。